

松下幸之助記念志財団 研究助成  
研究報告

(MS Word)

【氏名】 福原優策

【所属】 東京大学大学院 総合文化研究科 地域文化研究専攻 博士課程

【研究題目】 エストニアにおけるロシア語系エストニア人の社会統合  
—エスニック・マイノリティと国民国家形成—

## 【研究の目的】

バルト三国を構成するエストニアは第二次世界大戦後、約半世紀に亘りソ連に占領された歴史をもつ。ソ連期に主に労働者としてエストニアへ移住した大量のロシア語系住民は、1991年のエストニア独立回復に伴い、同国内で実質的に民族的マイノリティの立場に置かれた。同国政府にとって、実質的なソ連の継承国であるロシアは国家安全保障上の潜在的な脅威であった上、ロシア語系住民（ロシア語系エストニア人を含むロシア語話者の総称）と呼ばれる人々はエストニア総人口の約三割を占めていたことも関係し、彼ら/彼女らは社会的に不利な立場に置かれた時期があった。この状況は、少数民族の権利を重視する欧州連合（EU）への加盟交渉過程で十分に改善されたと言われる。言語・社会・経済的な観点から依然としてエストニア人とロシア語系住民の間に溝はあるものの、ロシア語系住民のエストニア社会への帰属意識や信頼は年々向上している。本研究では、ロシア語系住民へのインタビュー調査の分析を通じて、その要因の分析を試みる。

## 【研究の内容・方法】

内容：本研究は、民族的マイノリティを抱える多民族国家研究の一例である。ある国を構成する主要民族と比較した際に、社会的に不利な立場に置かれている民族的マイノリティが居住する国は世界各地に存在する。このような民族的マイノリティを抱える国家が、彼らを社会的に包摂しつつ安定した国家建設・運営を行う上で重要となる要因について、エストニアのロシア語系民族を事例として分析し、世界の似た状況の地域に対しても有効な知見を示す。本研究では、ロシアとの他者化、及び、エストニア・ロシアの間に置かれた心理状況に着目する。

研究方法：申請者は2022年2月から7月にかけて、エストニアに滞在し、当地の一般のロシア語系エストニア人（本研究ではエストニア在住のロシア語を母語とする集団を指す場合、この呼称を用いる）約20名を対象に現地でインタビュー調査を行った。調査結果をもとに、ロシア語系住民のどのような日常的な営みが彼らのエストニア社会への帰属意識や不満/満足感の蓄積に影響しているのかを分析した。それにより、同国が民族的マイノリティであるロシア語系住民を包摂し、社会への帰属意識や信頼を高める上で重要となっている要因を明らかにした。加えて、エストニアのロシア語系住民がロシアをどのように捉えているのか、そしてそれが彼らの対エストニア社会認識にどのような影響を与えているのかについても分析することを試みた。調査地域は、ロシアと国境を接し、住民の約95%がロシア語系住民である第3都市ナルヴァである。

本研究ではナルヴァのロシア語系住民の中でも特に20代前後の若年層のアイデンティティに着目した場合、若年層のロシア語系エストニア人の一部は、ヨーロッパ市民としての自己認識を強調する傾向にあった点について分析した。

## 【結論・考察】（400字程度）

結果として、ロシア語系エストニア人たちはエストニア出身であり、文化・政治・経済的に「先進的」なヨーロッパ文明に属しているという自意識を持ち、国境を接するロシアとの比較した際にも、ロシア在住のロシア人とは異なるアイデンティティ（エストニア/ナルヴァ出身のロシア語を母語とする集団）を有することが確

認された。このロシアとの他者化も相まって、彼ら/彼女ら間のヨーロッパ市民という自己認識を強めている可能性がある。他者化に関しては、EU側で生活を送っているロシア語系エストニア人にとっては他者であるロシア的なものとの出会いが頻繁にあるナルヴァという国境地域が持つ社会・地理的特徴が、自身のヨーロッパ的価値観を強化しているという点が観察された。このヨーロッパ市民意識は必ずしも欧州連合（EU）といった汎欧州規模の政治機構の影響を意識したものではなく、ヨーロッパという一種の文明圏に属しているという漠然とした感覚に支えられている場合も多いことが示唆された。それだけでなく、本調査が対象にしたロシア語系エストニア人たちのうち特に20～30代の若年層は、法の支配や民主主義の重要性、エストニアの歴史観に関しても理解も広く共有していることが確認されている。このヨーロッパ市民意識は、ロシア語系エストニア人たちのエストニア社会に対する感情や社会統合に、一定程度の肯定的な影響を及ぼしている可能性があることを示唆している。